

HQR010-08

会場:展示ホール7別室1

時間: 5月27日14:00-14:15

中部ヨーロッパの更新世-完新世移行期におけるヒト-環境系の相関

Human-Environment correlations during the Pleistocene-Holocene transition in Central Europe

小野 昭^{1*}

Akira Ono^{1*}

¹首都大学東京

¹Tokyo Metropolitan University

1. 発表の意図:本発表は、更新世末から完新世初頭にかけての人類と環境の相関関係を、どこまで具体的に議論できるかを事例的に解明し、一般化の可能性を検討する。岩相層序、生層序、考古層序、数値年代がセットで整っていることが理想であるが、そのような地域は世界各地でも多くはない。考古資料も、石器だけでなく、骨器、木器などが利用できる地域となると限定される。

ここでは中部ヨーロッパのライン川中流域の開地遺跡と、ドナウ川上流域の洞窟遺跡を検討対象としてとりあげる。

2. 枠組み:中部ヨーロッパでは、時代区分の枠組みは旧石器、中石器、新石器時代を使用している。旧石器時代の中は細分され、後期旧石器時代の終末を特に「晩期旧石器時代」として独立させている。境界はマグダレニアンとフェーダーメッサー・グループの間である。つまり、マグダレニアンの終末をもって後期旧石器の終わりとする。晩期旧石器の終末はアーレンスブルギアンの終末で区切る。名実ともに旧石器時代の終焉である。つぎの時代を中石器時代とする。

気候変動上の最も大きな区分は、更新世と完新世の境界を新ドリラス期の終わりで区切ることで、中緯度地帯ユーラシア全体に適用されている。中部ヨーロッパではこの境界が旧石器時代と中石器時代の境界である。1) 更新世/完新世、2) 新ドリラス期/プレボレアル期、3) 旧石器/中石器、の3つの境界を一致させている点が特徴である。1)と2)は気候の寒暖の関係から当然であるが、1) 2)と3)を一致させている点が同時に文化編年上の混乱を回避する一因になっている。

3. 発表の要点:中部ライン地方ではマグダレニアン期には投槍器による細身の投げ槍を使った狩猟がおこなわれていたが、晩期旧石器のフェーダーメッサー・グループでは矢柄研磨器が特徴的に出現するため、この段階で弓矢が出現すると理解されている。つぎのアーレンスブルギアンにはステルモア遺跡から弓と矢柄が発見されている。

南ドイツとくにドナウ川の上流域は、晩期旧石器から中石器、新石器時代初頭まで編年が最も詳細に組み立てられている。晩期旧石器に小形の背付尖頭器が次第に多くなるのと逆相関にマグダレニアンの要素(彫器、搔器など)が縮減する傾向が明瞭である。晩期旧石器から中石器への移行は連続的である。早期中石器の末には石器が極端に小形化する。中石器時代の早期と晩期のあいだに大きな差がありそうである。

ラウターエック岩陰遺跡ではドナウ川に沿って遡上してきた初期農耕民集団の線帯紋土器片が出土し、およそ7千数百年前にはレス地帯には農耕民が進出していた。

4. 特徴的な現象:中部ヨーロッパで最も大きな変化があるのは、新ドリラス期を挟む前後であ

る。マンモスステップ動物群が絶滅し、今日の動物相が成立する。南ドイツでもトナカイが激減し、ノロジカやビーバーが出現する。マンモスなど分厚い骨の緻密質を利用した道具は製作できなくなり、象牙製のヴィーナスや動物の小彫像なども消滅する。

旧石器時代末から中石器時代かけて、標準化された石製作と器種は次第に崩壊し、石器も全体として著しく小形化の傾向に進むと同時に形態的にも統一性を欠く傾向が顕著になる。

弓矢の出現は動物相の変化と1対1の関係にはないが、複雑・急激に変化する動物相と晩期旧石器のアレレード温暖期の森林環境下で考え出された可能性がある。

中部ヨーロッパにおける最古の土器は線帯紋土器で、現状ではおよそ7千数百年前までさかのぼる。日本列島をはじめ東アジアの土器の出現と比較して後出である。しかし、煮炊きする機能としてのピットがマグダレニアンV期（約15000年前）のゲナスドルフ遺跡の住居から多数発見されているので、生業の様々な面が物的な遺物にどのような形態をとって現れているのか、という視点でとらえ直す必要もあるだろう。

5. 結論：1. 気候の激変と人為的な狩猟圧の両面から、大形動物が絶滅すると、その分厚い緻密や牙を素材とした道具製作はできなくなり、ネガティブな形で影響をうける。2. 石器の小形化と統一性の欠如は、道具の小形化ではない。石器のより一層のパーツ化であり、全体的には旧石器時代の石器製作に比較して、柔軟な体系に移行した結果の現れである。プロセスを重視する旧石器的石器製作から、多様な結果を重視し、それを許容しうる道具への変化を遂げたと判断できる。シベリアの植刃器などはその比較資料である。3. 動物相や植生の変化で狩猟形態も変化し、弓矢が旧石器時代の最終末から出現する。この段階の矢柄の先端に装着されたのは石鏃ではなくフェーダーメッサーとよばれる「ペンナイフ形石器」である。弓と矢はセットであるが、出現期には矢柄に石鏃が常に装着されているとは限らないことを示しており、比較論として重要である。

キーワード:中部ヨーロッパ,更新世-完新世移行期,ヒト-環境系,旧石器時代,中石器時代,比較論

Keywords: Central Europe, Humans-Environment correlation, Final Palaeolithic, Early Mesolithic, Younger Dryas, Preboreal